

2015年3月7日
日本英語教育学会
第45回年次研究集会

基礎的英語力から使える英語力を引き出す試み

眠った語彙・文法の活性化と
社会言語学的・語用論的知識の教授

東京都市大学
植野貴志子

本発表の目的

- 大学の一授業における、基礎的英語力から「使える英語力」を引き出す試みを紹介する
1. 話す練習により、既習の文法・語彙を活性化
する
 2. 日英語会話データの観察により、社会言語学
的・語用論的知識を得る

「英語が使える」

- 異なる文化的背景を持つ人々と国際語としての英語を使って円滑にコミュニケーションが行える英語コミュニケーション力
- 一定レベルの文法・語彙力やTOEICスコアをもっているにもかかわらず、なぜコミュニケーションが上手く行えないか？
 - ✓ 話す練習の不足
 - ✓ 日英語のコミュニケーションのやり方の違い、及び、社会文化への認識の不足

コミュニケーション能力

- Linguistic competence (Chomsky 1965)
- Communicative competence (Hymes 1972)



- コミュニケーション能力の構成要素 (Canal & Swain 1980)
 - 文法的能力 (grammatical competence)
 - 社会言語学的能力 (sociolinguistic competence)
 - 談話的能力 (discourse competence)
 - 方略的能力 (strategic competence)



**言語が使用される社会文化への認識が必要 (Schulz 2006;
クラムシュ 2005; 小池 2002他)**

高校教科書における、社会文化への 認識の扱い

例 *Screen Play* (Oral communication①) 2011年

- 「意見を言う」「謝る」など言語行為の機能に焦点をあてた練習が主体
- それらの言語行為が異なる文化でどのように達成されるか、という視点はない

社会言語学・語用論研究

- 会話のスタイルの日英比較
「共話」と「対話」(水谷 1993)
- 意見、謝罪、質問、依頼などの言語行為に関する
日英比較

(例) 日本人の「意見」(重光ほか 2006)

- 対立しそうな意見を避ける
- 意見をはっきり言わないことで目下で
あることのメタメッセージを示す



日英語のコミュニケーションのやり方の違いを知り、
両言語の間をスイッチできる力を養うことが必要

授業の概要

- 都内私立大学
- 英語選択科目「キャリア・イングリッシュ」
- 受講者 前期8名、後期6名
(1年～4年生、短期語学研修経験者2名、大学院・留学希望者数名含む)
- TOEIC500～750点

「キャリア・イングリッシュ」

- 目的：国際的なビジネス場面で求められる英語コミュニケーションの基礎力を養う



1. 話す練習により、既習の文法・語彙を活性化
する
2. 日英語会話データ観察により、社会言語学的・
語用論的知識を得る

授業の構成

1. スモールトーク
2. ビジネス場面での会話を教材とした話す練習
3. 英語らしい会話のやり方を踏まえた話す練習
4. 日英語会話データ観察による、社会言語学的・語用論的知識の習得

話す練習

文化社会的
認識の涵養

1. スモールトーク

- 一週間の身の回りの出来事を伝え合う
- ペアで→全体で
 - 人前で英語を使うことへの抵抗感を軽減
 - 考えを整理して、より効果的に話す

2. ビジネス場面での会話を教材とした 話す練習

- *Business Encounters* (Michael P. Critchley, Nan'un do, 2013)
- リスニング／シャドウイング／ロールプレイ／日本語から英語への変換練習
- プレゼンテーションと質疑応答

3. 英語らしい会話のやり方を 踏まえた話す練習

- 教材 *Reach Out Intermediate* (Waseda University International, 2013)
- 社会言語学・語用論研究の知見から日英語の相違を示したうえで、
 - 意見の述べ方、根拠の示し方
 - 会話展開の仕方、等を練習

例1. What is the most challenging sport? Why?

A: Opinion:

Supporting Statement 1:

Supporting Statement 2:

B: Challenging opinions

A: Restating opinions

日本語の意見提示の
論理展開は、一定の
パターンをもたない
(萩原 2009)

周辺を探りつつ核心へ、
或いは、結論・根拠を明
確に示さないこともある

例2. Continuing conversation “The AAA Technique”

A: Have you seen any good movies recently?

B: **Answer the question**

Yes, I saw an interesting Korean movie last night.

Add extra information

It was a comedy.

Ask a related question

Do you like Korean movies?

日本人、及び、日本人英語学習者の会話では、質問に対する答えの次の順番が十分に活かされていない(早野 2014)

4. 日英語会話データ観察による 社会言語学的・語用論的知識の習得

- 同一条件で収録された、日英語会話の映像及び書き起こし(ミスター・オー・コーパス)を見て、日英語のコミュニケーションの特徴を捉える
- 日本語話者のコミュニケーション・スタイルを自覚し、英語話者のコミュニケーション・スタイルを理解する

観察した会話データ

- 日英語の学生同士の会話
- 日英語の教師と学生の会話

学生の気づき

日本語

- 二人で同じ話題を話す
- あいづち的反応が多い
- 一人の発話が短い
- 教師と学生の上に上下関係がある、等



- 「共話」
- 共感志向
- 相互協調的

英語

- 一方がまとめて話すのを他方が聞く
- あいづちが少ない
- 一人の発話が長い
- 教師と学生が対等、等



- 「対話」
- 情報志向
- 相互独立的

学生アンケートより

1. スモールトーク

表現力が向上した。／人前で話すことに慣れた。／会話のやりとりが向上した。

2. ビジネス会話を用いた話す練習

ビジネスに必要な表現、日常生活にも使える表現が身についた。／文法の復習ができた。／日本語訳から英語への言い換え練習が有益だった。

3. 英語会話のやり方を踏まえた話す練習

基礎力、応用力両方が身についた。／自分で考えて話す能力が身についた。

4. 日英語会話データの観察

外国人と日本人のコミュニケーションの違いを具体的に感じる事ができた。／海外に行く際に役に立ちそうだった。／知らないことを知ることができて面白かった。／文化の違いを知ることができてよかった。／研修先でのホームステイで、ホストのお母さんに何か言うたび、“Why?”と返された。答えるのが面倒になり、話しかけるのを止めてしまった。英語話者が情報の明確化を求めることを知り、“Why?”の訳が分かった。

英語コミュニケーション教育への示唆

- 少人数クラスにより、一人一人の学生が発言する機会を確保
- 日英語会話データ、社会言語学・語用論研究成果の活用により、日英語コミュニケーション・スタイルの特徴を効果的に教授
- 日本語母語話者の英語教員の役割・・・日本人のアイデンティティを踏まえたうえでの英語コミュニケーション指導

謝辞

本研究で使用したデータは、平成15～17年度科学研究費補助金基盤研究B1(課題番号15320054)「アジアの文化・インターアクション・言語の相互関係に関する実証的・理論研究」(代表:井出祥子)において収録された「ミスター・オー・コーパス」の一部である。

参考文献

- Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge: The MIT Press.
- 荻原稚佳子 (2009) 「意見述べにおける日本人の論理展開についての一考察」『明海日本語』(14) 3-11.
- 早野薫 (2014) 「『気持ち』を伝える英語コミュニケーション力の指導」日本英語教育学会第44回年次研究集会 2014年3月2日 (早稲田大学)
<http://www.decode.waseda.ac.jp/announcement/documents-for-2014-03-01-02/KaoruHayano.pdf> (2015-03-15)
- Hymes, D. (1972) *On Communicative Competence*. in Pride, J. B. and J. Holmes. (eds.) *Sociolinguistics*. Harmondsworth, England: Penguin Books.
- 小池生夫 (2002) 「英語力とは何か」『英語展望』(109) 8-11.
- クラムシュ, C. (2005) 「文化リテラシーとコミュニケーション能力」『国際研究集会 ことば・文化・社会の言語教育』早稲田大学 4-37.
- 水谷信子 (1993) 「『共話』から『対話』へ」『日本語学』(12) 4-10.
- Schulz, R. A. (2006) *Reevaluating Communicative Competence as a Major Goal in Postsecondary Language Requirement Courses*. *Modern Language Journal*, 90, 252-255.
- 重光由加・村田泰美・津田早苗 (2006) 「異文化体験アンケート」『ポライトネスと英語教育』(編) 堀素子ほか 東京: ひつじ書房 5-34.